

早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨

高麗の国家祭祀と多元的世界観に関する研究

― 円丘祀・八関会を中心に ―

奥村周司

「二」研究の主題

本研究の主題は、唐帝国滅亡後の動揺する東アジアにおいて、九一八年から一三九二年まで朝鮮の地を統治していた高麗が、隣接する中国から政治的にも文化的にも圧倒的な影響を受けるなかで、どのようにして自らの存在を確立し、自律・自尊の国家姿勢・世界観を保持していたのかという問題について説明することである。

この中華帝国の支配秩序にいかに対処するかという問題は、東アジア世界の諸民族・諸国家にとっては時代を超えて抱えてきている共通する課題であり、多くの研究が蓄積されていると考えられるが、本研究では、高麗王朝の国家祭祀の側面から考察することとし、筆者がこれまで発表した高麗の国家祭祀と王権に関する拙稿を第一章から第六章に集録し、その前後に序章と終章を新たに書き加え、卑見を述べた。

「二」論文の目次

序 章 問題の所在

- 一 中国の支配秩序と自律
- 二 各章の概要
- 三 拙稿に対する批判と私見

第一章 高麗における八関会的秩序と国際環境

はじめに

- 一 外国人朝賀の実態
- 二 八関会の構成と理念
- 三 八関会と「朝貢」体制
- 四 八関会の伝統的性格
- 五 八関会的秩序の形成

六 八関会的秩序と国際環境

- (一) 日本との関係
- (二) 宋との関係
- (三) 元との関係

おわりに

第二章 高麗の外交姿勢と国家意識 — 「仲冬八関会儀」及び

「迎北朝詔使儀」を中心として —

はじめに

- 一 八関会儀礼に表われた高麗の国家意識
- (一) 高麗八関会の特徴
- (二) 高麗以前の八関会
- (三) 開京八関会と西京八関会
- (四) 太祖十訓要と八関会
- (五) 八関会儀礼の構造と国家意識
- (六) 八関会儀礼の構成
- (七) 外国人朝賀と朝貢体制
- (八) 八関会的秩序の成立と終焉
- 二 使節迎接礼と高麗の外交姿勢
- (一) 八関会的秩序と冊封体制
- (二) 「迎北朝詔使儀」の特徴
- (三) 北朝詔使南面・高麗国王西面の面位関係

おわりに

第三章 使節迎接礼よりみた高麗の外交姿勢

— 十一、二世紀における対中関係の一面 —

はじめに

- 一 「迎北朝詔使儀」と外交姿勢
- (一) 使節迎接礼の成立時期と性格
- (二) 使節迎接礼の比較
- (三) 国王「西面」と外交姿勢
- 二 「迎北朝詔使儀」と国信関係
- (一) 麗・宋関係と国信使の派遣
- (二) 国王「西面」と国信関係

おわりに

第四章 医師要請事件にみる高麗文宗朝の対日姿勢

はじめに

- 一 医師要請事件の概要と政治的意義
- 二 「聖旨」という用語と国家姿勢
- 三 年号使用の実態と外交関係
- 四 王則貞に対する処遇と対日姿勢

おわりに

第五章 高麗の円丘祀天礼と世界観

はじめに

- 一 円丘祀の開設状況
- 二 円丘祀の構造と対外姿勢
- (一) 円丘祀における神座・使客
- (二) 輿服・奏楽と対外姿勢
- 三 円丘祀と高麗の世界観
- (一) 祝文の自称形式と王権の位置
- (二) 円丘祀的世界と八関会的世界

おわりに

第六章 高麗の国家祭祀からみえてくるもの

― 円丘祀と八関会にみる世界観 ―

- はじめに…円丘祀天礼と多元的世界観
- 一 円丘の規模と配神
 - 二 円丘祀における祝文の自称形式
 - 三 円丘祀における外国人参列の有無
 - 四 円丘祀と八関会の織り成す高麗的世界

おわりに

終章 高麗の国家祭祀と多元的世界観

- 一 円丘祀と多元的世界観
- 二 八関会と多元的世界観
- 三 「多元的世界観」提示の経緯と意義

〔二〕各章の概要

序章 問題の所在

序章では、本研究における問題意識、各章の概要及び拙稿に対する批判とそれへの私見について述べた。

本研究は圧倒的に強大な中華帝国に隣接する高麗が、どのようにして独立国家としての自律・自尊の国家姿勢・世界観を維持していたかを明らかにすることが主題であるが、その際筆者が注視したのは、朝鮮では高句麗の時代から中華帝国の支配秩序の影響を受けながらも、それと対峙する独自の世界を形成する存在であるという国家意識・世界観が形成されていたことであり、高麗の国家祭祀である円丘祀と八関会という祭天礼もその伝統的な国家

意識・世界観の系譜を継承し、顕現する祭祀として理解できるといふ点であった。

第一章 高麗の八関会的秩序と国際環境

本章では、高麗王朝において固有の「俗節」として位置付けられ、人々に広く信仰されていたと考えられる天靈や山川の竜神を祀る国家祭祀・八関会の開設実態と意義について検討した。

とりわけ八関会の冒頭で行われる高麗王朝の開祖（太祖）に対する拝謁儀礼「詣祖真儀」が、高麗の開祖（太祖）と国王との君臣関係を確認する王権再生を象徴する儀礼として考えられ、また八関会に参列する宋商人・女真人・耽羅人・日本人などの諸外国人による朝賀儀礼が、高麗王に対する朝貢儀礼として理解できるところから、高麗では、来朝する周辺の外国人を八関会という国家祭祀に参列させ国王に対する朝賀儀礼を行わせる、いわば高麗王を中心とする「八関会的秩序」と呼べるような世界認識が形成されていたことを明らかにした。

なお、日本人の八関会への参列記録は文宗二十七年（一〇七三）年の一回にとどまり、『高麗史』礼志の「仲冬八関会儀」においても記載されていなかった点については、文宗三十三年の高麗の医師派遣要請を日本側が拒絶したことの原因があったと推察しているが、その医師要請事件については第四章で検討した。

第二章 高麗の外交姿勢と国家意識 — 「仲冬八関会儀」及び

「迎北朝詔使儀」を中心として —

本章では、第一章で明らかにした八関会から窺うことができる高麗王を中心とする八関会的秩序と、それが形成された当時の中国の「北朝」及び宋に対する外交関係との関連について、使節迎接礼の側面から考察した。

「北朝」とは、十一、二世紀の高麗が冊封を受けていた中国王朝の遼のこ

とであると考えられるが、その北朝の詔勅をもたらす使節（詔使）を迎接する際に、北朝の詔使が宗主国として南向き（南面）の席に就くのに対して、高麗王は本来の冊封された臣下としての北向き（北面）の席にはなく、賓客を迎える主人の西向き（西面）の席に就いて応接していたことを指摘した。また、当時冊封関係が結ばれていなかった宋の使節（国信使）を迎接する場合も、南面する宋の国信使に対して高麗王が西面して応接していたことから、この高麗王西面の面位を、上下の君臣関係を忌避し対等に近い傾斜関係を示しているものと理解し、同時代に形成された高麗王が宋商人や女真人など外国人を朝賀させる八関会的秩序も、中国王朝の冊封体制内に包含されるものではなく、それに対峙する高麗独自の秩序であったと指摘した。

第三章 使節迎接礼よりみた高麗の外交姿勢

— 十一、二世紀における対中関係の一面 —

本章では、第二章で触れた使節迎接礼における中国の使者と高麗王の面位関係に注目して、『高麗史』に収録されている「迎北朝詔使儀」「迎北朝起復告勅使儀」「迎大明詔使儀」「迎大明賜勞使儀」「迎大明無詔勅使儀」、『大唐開元礼』所収の「皇帝遣使詣蕃宣勞」、及び『宣和奉使高麗図経』所掲の「受詔」などの儀礼記事を分析することによって、高麗の十一、二世紀における遼及び宋との外交関係について改めて検討した。

そのなかで筆者は、皇帝の詔書の有無によって使節を迎接する儀礼が異なることを明らかにし、詔書を伝達する使節（詔使）が南面するのに対して、高麗王が臣下として北面するのではなく西面して対応しているところから、当時の高麗の対中関係を垂直的な上下の君臣関係（南面・北面の面位関係）を忌避するような傾斜的關係として把握し、同時代の高麗王を中心とした独自の八関会的秩序の形成もその対中姿勢と密接に関連していることを再確認した。

またその際、『高麗史』卷三三食貨志の「貨幣」の項において、肅宗七年十二月の「制」に、「富民利国に錢貨より重きは莫し、西北両朝之を行ふこ

と已に久し。吾東方独り未だ之を行はず。今始めて鼓鑄之法を制し、其の鑄するところの錢一五千貫分を以て宰枢文武両班軍人に賜ひ以て権輿せしむ。錢文を海東通宝と曰ひ、且に用錢を始めるを以て太廟に告げんとす」とある。貨幣鑄造記事にも触れ、肅宗七（一一〇二）年当時の高麗では宗主国遼を「北朝」と、国信関係にあった宋を「西朝」と、そして高麗自身を東方として、鑄造した貨幣名を「海東通宝」とするなど、遼・宋・高麗をあたかも天から俯瞰したように方位によつて呼称し、三国を鼎立関係に近い立場の国家として把握する独自の世界認識が形成されていたことにも言及した。

第四章 医師要請事件にみる高麗文宗朝の対日姿勢

本章では、文宗二十七（一〇七三）年の八関会開設の際には日本人も参列していたが、日本人の参列記事はその一回のみであり、また八関会の儀礼内容を詳説している『高麗史』礼志の「仲冬八関会儀」には宋都綱・女真人・耽羅人の朝賀儀礼については説明されているが、日本人の朝賀儀礼には全く触れられていない点に注目し、その原因と意義について考察した。

その結果、高麗王朝では文宗三十三（一〇七九）年に国王の病氣治療のため日本に医師派遣を要請している、そのようなことができる関係、すなわち八関会的秩序の及ぶ関係が形成されていると認識されていたけれども、日本が医師派遣を拒絶したため、それを契機として八関会に参列させる対象から日本を除外したのではないかと推定すると同時に、八関会的秩序が現実の外交関係と密接に関連していたことを示す事例として注視した。

第五章 高麗の円丘祀天礼と世界観

本章では、皇帝に即位できなかった高麗が、なぜ中国の皇帝の祭天礼である円丘祀を国家祭祀として導入したのか、どのように開設していたのか検討し、さらに高麗固有の祭天礼でもある八関会とはどのような関係にあったのかについて考察した。

その結果、高麗に導入された円丘祀は、円壇が小規模で、宇宙の星々を祀

る中心的な冬至の円丘祀は開設されず、中国の円丘祀では中華帝国の世界を可視的に示すような外国人の朝賀儀礼が行われていたが、高麗の円丘祀では省かれているなど大きな変更が加えられていたことが明らかになった。これらの祭祀の変更は中華帝国への配慮に基づくものと考えられるが、注目されるのは、それにもかかわらず、天帝に奏上する祝文において国王が中国の場合と同様に直接上帝に称臣し、「名」の他に「姓（王）」も自称していることであり、そのことから、高麗における円丘祀導入の主たる目的は、高麗国王の王氏が中国の皇帝と同様に、天帝に直接称臣し君臣関係を確認することの一点にあったという結論にいたった。

また本来円丘祀で行われる外国人の朝賀儀礼が高麗の円丘祀では行われず、代わりに高麗固有の祭天礼である八関会において舉行されているところから、高麗の円丘祀と八関会は一種の補完関係にあったと考え、両祭祀を関連付けることによつて、円丘祀を開設し中国の皇帝と肩を並べ天帝に称臣する資格（天命）を得たと自認する高麗王が、固有の祭天礼である八関会において、来朝する外国人をも参列させて朝賀儀礼を実施するという、中華帝国の世界観に対峙するような独自の世界認識を形成していたと指摘した。そしてその世界観を、春秋時代の秦・徐・魯の国々が、周の冊封を受けながら、同時にそれぞれ上帝を祭る祭天礼を舉行していた関係に近似しているとみなし、多元的世界観と呼ぶことにした。

第六章 高麗の国家祭祀からみえてくるもの

— 円丘祀と八関会にみる世界観 —

本章では、本研究の主題である高麗の国家祭祀からどのような世界観が読み取れるのかを、第五章の考察を踏まえ、円丘祀と八関会を中心に再検討した。

その結果、高麗の国王が中国皇帝の天帝を祀る円丘祀を、冬至の祭祀を除き、外国人朝賀も行わないなどの中国に対する一定の配慮や改変を加えて導入した意図が、中国の皇帝と並び天帝に称臣して天命を受けた存在であ

ることを明確にすることの一点にあったものと理解した。その一方、天命を受けた高麗王が天靈や竜神を祀る固有の祭天礼である八閔会を開設し、高麗の円丘祀では省かれていた来朝する外国人をも参列させる、高麗王を中心とする独自の世界秩序・八閔会的秩序を形成していたことを再確認し、この円丘祀と八閔会が織り成す高麗の世界観が、一元的な中華帝国の世界観に対峙するという意味で、多元的世界観であったことを明らかにした。

終章 高麗の国家祭祀と多元的世界観

終章では、筆者が「多元的世界観」という視点を提示した経緯と儀礼的な根拠について再確認し、その意義について述べた。

筆者が「多元的世界観」について指摘したのは一九九五年一〇月発表の「李朝高宗の皇帝即位について―その即位儀礼と世界観―」及び一九九七年四月発表の「高麗の円丘祀天礼と世界観」においてであったが、拙稿発表の二カ月後の一九九七年六月に、韓国の盧明鎬が「東明王篇と李奎報の多元的天下観」（「東明王篇斗李奎報의多元的天下観」）を発表し、「多元的天下観」という類似した視点を提示している。盧明鎬の論文発表が筆者の発表の二カ月後であったため、筆者はその研究を参照できなかったが、盧明鎬も筆者の拙稿には触れていない。しかし盧明鎬はその後一九九九年六月に発表した「高麗時代の多元的天下観と海東天子」（「高麗時代의多元的天下観斗海東天子」）において、拙稿について「高麗の国家的祭儀である円丘祀や八閔会の儀礼を通じて、中華帝国との従属関係を認めるなかでも自律・自尊の姿勢をもつ天下観、いわば昊天上帝のもとに複数の国家が存在するとみなす春秋時代的な多元的世界観が存在したとみる研究もあった」と紹介している。

筆者の理解では、盧明鎬の主張と比較してみると、高麗において国王が中華帝国の皇帝と肩を並べる存在であるという多元的世界観（天下観）が形成されていたという認識では同じであるが、その論拠には少なからぬ相違がある。盧明鎬は、同時代の文人の作品や宮廷の宴などで披露された歌謡の歌詞にみえる、高麗国王に対する「皇帝」「海東天子」などの美称を多元的天下観存在の論拠として挙げている。それに対し筆者は、高麗が中国との政治関

係に配慮しつつ中国皇帝の祭天礼である円丘祀を国家祭祀として開設し、上帝に直接称臣して祭祀を行っていること、及び高麗固有の祭天礼である八閔会を国家祭祀として開設し、宋商・女真人・耽羅人・日本人などを参列させる朝賀儀礼を行うことによって、来朝する外国人勢力をも包含する自律・自尊の独立国家としての姿勢を示し、それによって中国の皇帝と対峙し肩を並べる存在であるという国家としての多元的世界観を顕現していたことを明らかにした。

〔四〕各章の基になる拙稿の初出

第一章から第六章の基になっている拙稿の初出は以下のとおりである。

- 序章 新稿
- 第一章 『朝鮮史研究会論文集』第一六集、朝鮮史研究会、一九七九年三月
- 第二章 『歴史学研究・別冊特集』歴史学研究会、一九八二年十一月
- 第三章 『史観』第一一〇冊、早稲田大学史学会、一九八四年三月
- 第四章 『朝鮮学報』第一一七輯、朝鮮学会、一九八五年十月
- 第五章 武田幸男編『朝鮮社会の史的展開と東アジア』山川出版社、一九九七年四月
- 第六章 『史滴』四二号、早稲田大学東洋史懇話会、二〇二〇年十二月
- 終章 新稿